

学習形態 Zoom での講義

テーマ 『教行信証』とは何か。

— 『教行信証』撰述の意図 —

## 第二部

### 『化身土巻』に学ぶ (13)

前回は、p377-7「清浄<sup>し</sup>土」か「清浄<sup>ど</sup>土」か？というところでだいぶ盛り上がりましたが、簡単に“親鸞のミス”と言ってしまっていていいのだろうか。もし読み違いをされたなら、読み違いのまま読んでいくとどういう意味にとらえることができるか、ということまで読み込んでいかなければならない、ということを広瀬先生の前述の文からも窺い知ることができるのではないかと思います。

これについては、橘さんがご意見を出してくださっておられました。

「清浄土を了知するに」についてアレコレ論考 橘佑輝

○広瀬さんの文章を読んで

古びていない、すごいなと思って読ませてもらいました。僕自身は大谷派の在野で法話を聞く形ですとずっと学んできました。その時に『化身土巻』の言葉はよく語られる一方、前後の繋がりが弱くポンと一言だけ金科玉条のように出てきて、分かったような分からんような感覚のまま聞いてきました。

○「訣別」の構造と「浄」の意味

広瀬さんの文章の中で「訣別」と言う言葉があります。その言葉を通して語られたことは「文意だけで見ると、わざわざ引かなくてもよいと思われる『論語』の文を引き、訓読ひとつで文意をひっくりかえして」

文言として直接は『教行信証』に書かれていない事柄です。広瀬さんが汲み取り言語化したこの「訣別」の構造こそが、『化身土巻』において親鸞が明らかにしたかったものだろうと僕は思うのです。

論語のもとにある儒教は定められた倫理道德によって人間を支配すると。倫理道德に毒された仏教もまた儒教と同じように人間を縛ると。けれどもそこに非仏教性を見出していけるならば、今度は人間を解放するものになるはずで。

親鸞にかかれば人間の創り出したものはすべて仏教なのでしょう。資本主義も社会主義も仏教として『化身土巻』に引かれるはずで。そこに非仏教性を見つけるかぎりにおいて人間を育み歩ませ解放させるから。

それが仏法ましまさぬ世界はないといわれた言葉の意味でもあるでしょう。仏法が形を変えて世にそのまま染み出ている（法界縁起）のではなくて、世にあるものを一枚めくればそこに仏法のはたらきは届くと。

でそのとき、ものを転じさせるには中心点がいります。その点が何かというと清浄です。とくに「浄」ですけども“どんなに濁った泥水であっても三日三晩放置すれば、そこに透き通る上澄みができるだろう、それを浄というんだ”。これが中国における浄の概念です。意味は二つ。一つはどんなに汚れたことであっても、そこに学ぶべきことは流れているという

こと。もうひとつは綺麗な上澄みによって底の汚れが見えるようになる。濁りの正体が明らかになるということです。

○「清浄土を了知するに」の響き

二河譬が『信巻』と『愚禿鈔』で引かれます。二つの相違については榊さんが修練の場で修練生に向けて問題提起されていたと記憶しています。そこにおける「能生清浄願往生心」と今回の「清浄土を了知するに」はつながると思うのです。

p377～p378 において人壽が三万歳→二万歳→百歳と、人間の命がどんどん縮んでいきます。で最後の百歳のところで白法そのものは尽きて消えて、時代の悪が語られるわけです。そのくだりのアタマにある「了知清浄土」を親鸞はわざわざ読み換えて「清浄土を了知するに」と置くわけです。

清浄土を了知するに、かくのごとき次第に今、劫濁・煩惱濁・衆生濁・大悪煩惱濁・闘諍悪世の時、人壽百歳に至るまで、一切の白法尽き、一切諸悪闇翳ならん。世間は、たとえば海水の一味にして大鹹なるがごとし。大煩惱の味、世に遍満せん。集会の悪党、手に鬪腕を執り、血をその掌に塗らん、共にあい殺害せん。

これは時代の悪を見つけるちからこそ、清浄さから与えられるものなんだと言いたいのではなかろうか。自分の生きている年代を計算して、ぎりぎり像法だなどという姿勢から離れる力でもありましようし、白法が尽きたことを受けとめる力でもありましようし、いかなる戦争をも美化しない力でもあるでしょうし、悲惨なことに涙する力でもありましようし。法滅を生きる人間が持つ清浄さはここにあると。このように読んだときに次の一文。提謂・波利・もろもろの商人の食を受けて、彼等がためのゆえに、この閻浮提をもって天・龍・乾闥婆・鳩槃荼・夜叉等に分布せしむ。護持養育のゆえに。

“商人という在俗の者の施しによって釈尊は生活をして、彼らの為にそこに仏法が育てられたんだ。”このことが流れとしても繋がっていきますし、もっと言えば『行巻』p161～162の「家清浄」と「歡喜」にもつながる。『行巻』では、“一人では解決できないような時代の苦しみを見つけることが歡喜なんだ”と言って、僕こんなサツパリ分らんぞって、ずっと思ってきたんですけど。

今回榊さんに促されて、あらためて思索したら繋がって、ああ親鸞すごいなあって思いました。あらあらと急いで書きなぐりしたので、読みにくいかもしれません。今の考えはこんなところですよ。

※追記

それから「清浄土」を「人間のもつ清らかさ」と読んだ根拠ですが、親鸞はどうも菩薩と大士を使い分けています。龍樹にしても龍樹菩薩だったり龍樹大士だったり。ボディーマハサットバマハーサットバですから、そこに関して学術的には違いなどないはずなんですけど、ともかく使い分けています。で明確には言えないものの大士というときには人間の大きさに立ったことを言いたいような感じがします。それで「土」に人間の意味を見て、ここまで展開しました

という文章です。大事な視点を指摘していただきましたので、赤線をひいておきました。これは修多羅によって「外教・邪偽の異執を教戒」するという課題への視点とと思いました。特に「清浄」という「転じさせる」という「清浄」の概念、ここは共感を持てるところであります。だからこそ、「土」と「土」が気になってしかるべきかと思えますね。

橘さんのおっしゃるように「土」と見たほうが文章的に自然に読むことができるかもしれませんが親鸞はなぜ読み違えをされているのか。

親鸞がこの文章を引用する時点で、浄土というこの課題は末法時期の論争から派生していることは、私たちは前回で学んできたわけでありませぬ。

その論争の基点は「浄土は末法期になってから必要であつて、まだ末法期に入っていないうちは聖道門が必要である」というところから始まっているわけですね。ですから、親鸞の脳裏には「浄土」という言葉がイメージされていたのではないかと、私は思っています。

それに、この前の段落の文 p 373 「諸天王護持品」の文頭に「その時に世尊、世間を示すがゆえに」と出てまいります。そして次の段落に「清浄土を了知するに」という文で書き始められます。これを親鸞は、「世間を示す」とことと「清浄土を了知する」とことと相対させて見られたのではないかと、とも想像いたします。

ついでに、資料を探りながら申し上げますと、『坂東本』ですと、両方とも「清浄土」と書かれています。『高田本』ですと最初の方ははっきりと「清浄土」と書かれていて、次のは「清浄土」と書かれていて、その「土」の下に小さい字で「土」と書かれています。これを見ると、どうしても「清浄土」と読みたい意思が感じられます。

ただこの『高田本』は従来は親鸞聖人の御真筆とされてきましたが、近年は直弟子専信坊専海の書写本であるとされている。とはいうものの聖人存命中の書写であつた（建長七）、とされています。とするならば、専信坊独断の書写とは考えずらい。聖人の目を通してはならずであり、聖人の意思も反映、いや影響を及ぼしていると見た方が自然ではないでしょうか。

ここで、『最終稿本教行信証の復元研究』鳥越正道著という本を紹介しておきますが、これは草稿本・書写本・清書本の分析をあらゆる方面から追及されている資料学的大作と言える本です。これによりますと、草稿本『坂東本』は一気に書かれたのではなく、60 歳ころ、70 歳ころ、そして 80 歳ころの三回書き添えられていると述べられています。それは親鸞の筆跡で年代を探るということで推し量られたというのである。その大半は 60 歳前後の筆跡で、『化身土』の「大集経」の部分は 70 歳のころの筆跡で加筆されている。さらに 80 歳のころに手を加えている、と述べられています。

『聖典』 p 1137 を見ていただきますと、建長 7 年 83 歳に「専修寺本」が書写されているので、手を加えられたあとの『坂東本』を書写されたともみることできるわけです。

その次の段落 p 381 「その時世尊、重ねてこの義を明らめんと欲しめして」とありますが、この「この義」とは一体何か、ということも引っ掛かっておりまして、この偈頌をどう読み説くのがヒントになってくるような気がいたします。

ここまで長い文章なので、丁寧に読んでいかなければならないところですが、ともかく p 372 の『月蔵経』から（華嚴経）までは一連の流れとしてみるすることができます。その始まりに「もろもろの仁者、かの邪見を遠離する因縁・・・」というところから始まりますので、人（鬼神）を課題にしているので、「清浄土」となるのが自然でしょう。しかし文中には「善浄仏土（p 373）」という言葉が出てきたり、次には「世間を示すがゆえに」とあったり、「この娑婆仏国土に来たらしめん（p 382）」などというように「土」を示す言葉も出てきています。

そして『坂東本』にはありませんが、『高田本』では「已上」のすぐ下に（華嚴経）の文「又言離於占相・・・」と付け加えられています。

前回は、この p 385 「（華嚴経）また言わく、・・・」というところまで申し上げました。そしてこの（華嚴経）というように『華嚴経』の名を出さずに述べられていることに着目しまして、「この『月蔵経』の結びとして述べられているのではないかと」と申し上げたかと思ひます。（講義ノートには書いてませんが）

繰り返しになりますが、ここまでの段落をもう少し整理してみたいと思ひます。

まず始まり（p 368）で「外教・邪偽の異執を教誡せば」ということで、教誡する言葉が『涅槃経』をも

って述べられます。そして次に「優婆夷」に対しての教誡の言葉がのべられています。その次から『日藏経』をもって外教・邪偽の状況、つまりカルシッタ仙人を崇めるということが述べられています。(p 370) そして次の『念仏三昧品』ですが、ここでは魔女の離暗が魔王の魔波旬を仏に帰依させた、という話がのべられていきます。

そしてここから『月藏経』ですが、『坂東本』ではこの間が一行空けてあります。ということはここに段落の意図が見えるということでしょうか。この『月藏経』では「仁者」と「悪鬼神」の相違が述べられていきます。(p 373—下 2 まで。)

また次に、『諸天王護持品』ですが、ここでは「坂東本」も「高田本」も段落らしい書き方がなされています。ここは世尊が「世間を示す」がゆえに、娑婆世界の主である大梵天王に問うところから始まっていくところですね。しかし、世尊のその問いの意図がなかなかわからないのではないかと、とされているのでしょうか。ですから世尊が p 376-9 「重ねてこの義を明かさん」というわけです。その義とは、鬼神たちが国土のあらゆるところで護持養育しているが、それらはすべて「願じて、仏、分布せしめたまえり」 p 377-5 ということである、と言っているわけです。この「重ねてこの義を明かす」ことの意味を読みこなさなければならぬと思います。

そして問題の「清浄土(土)を了知するに」であります。これにもまた p 381-下 4 「重ねてこの義を明らめんと欲しめして」と出てきます。そう致しますと、この偈頌のポイントは何か、ということになってきます。そういたしますと、そのポイントは「濁悪世に至りて・・・・この娑婆仏国土に来らしめん。」という部分でしょう。ということは、やはりこの娑婆が仏国土「清浄土」であるということの意味していたのではないかと思うんです。また p 378-7 にも「清浄土を了知するに」と出てきて、五つの濁世を示し、(末法には)悪が世に遍満する、と説かれています。この末法の世を見据えることができるのも清浄土を了知するがゆえに、と考えることができるのではないかと思うわけです。もう一つ、この清浄土を「仁者」あるいは仏教を護り衆生を護持養育する鬼神とすればどうなるか、ですね。ここに(華嚴経)の「占相」が大きな意味を持ってきます。

さて、其のあとの二つの引用文、「提頭頼吒天王護持品」と「忍辱品」読めますか。(華嚴経)がなければすんなり肯定的に読んでしまいそうですが、これがあることによって、この二つの文に疑問を持たせると感じます。そしてこの(華嚴経)の文は教誡の文になっています。ここに「占相」とありますが、これが前二文の内容を示しているのではないかと考えられます。これを探らなければならぬのですが、・・・。

ということで、今回は次のような課題を提唱したいと思います。

## 課題 57 占相を考える —占相の現代的意味—

占相とは「吉凶の相を占うこと」ですが、これをもうちょっと考えてみたいと思います。私たち現代において「占い」はゲーム的感覚において、楽しんだりしています。しかしそればかりでしょうか。今「吉凶の相」と「占う」とに注目してみたいと思います。

「吉凶の相」を現代感覚に置いて考えてみると、損得感情、あるいは利害感覚ではないかと思われまふ。そして「占う」ということはそういう感情や感覚を基準として判断するということでしょうか。その判断は偶然性に頼るのか、方角に頼るのか、自らの知力で決めるのかはそれぞれですが、その結果として自ら判断し選び取るわけです。つまり我々の判断基準が損得感情である、ということです。我々は何を基準として物事の判断をするか、です。

そういう意味として、占相を捉え直してみると、『提頭頼吒天王護持品』では「彼ら同時に」(p 384-下 4)そして「我いままた毘沙門天王と同心に」(p 384-下 1)という点が見つかります。これは損得勘定から出てくる「長いものには巻かれろ」的な判断が見て取れるわけです。

次の「忍辱品」においては「諸仏の法を護るのは大変結構なことだ」と一旦はほめたたえるわけですね。

そして次に「戒を持たざらん者」について二種類述べて、一方はすでに涅槃が約束されていることを述べ、もう一方では、非法をもっていろんな悪事を行い、地獄に落ちるということを述べている。そして次に、そこに集まった天や龍、極臭鬼など達が一齐に「出家者に対して師長の想いで護持養育いたしましょう」と言い、「もしわれわれ以外で、出家者を悪心をもって見るならば、彼らとは一緒に居たり一緒に食事などせずに罰していきます」と言っているわけです。要するに出家者を敬わない者には罰を与えるというわけでしょう。これは排除の論理です。これも利害関係からくる罪福心の現れではないでしょうか。これに対して「罪福の因縁を信ずべし」というわけでしょう。罪福は縁起の法によってあらわれてくるだけのことで、我々が善悪の判断すべきではないことを示しているわけです。この善悪の判断も占相であるとみてもおかしくはないと考えます。つまり我々が無意識に判断基準を持っているそのものを問い直すということを指摘しているのでしょう。

こうしてみますと、「占相」とは、前回申しました「占星術」(天文学)というよりもそれから派生してくる吉凶や損得を判断する感情、それこそが外教・邪偽の異執であることを示しているのではないのでしょうか。「占星術」は一つの科学と見てよいかと思うのですが、それによって生じてくる欲望の姿(相)が異執である、ということ指摘しているのではないのでしょうか。私たちの物事の判断基準は「真実」という一点ですね。しかし生活の中では損得勘定で、言葉が悪いならば、有益かどうかで判断していることが多いのではないのでしょうか。それは自分のためだけではなく、人のためになること、ということが基準となっていたりするのではないのでしょうか。そしてその基準を正当化しているのが現実ではないのでしょうか。皆さんのご意見を頂戴いたしたいと思います。

それでは今回は、『首楞嚴經』のところから進めていきましょう。実はお恥ずかしい話なんですが、『首楞嚴經』と言えば『首楞嚴三昧經』だと思込んで、原本(大正大蔵經)にあたっていたんですが、全然引用文が出てこないんですね。で、色々調べて解ったんですけど『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經』(巻十)の第六巻に出てくる文章でした。これを見てみると、面白い引用の仕方です。引用されています。「彼等の諸魔、彼の諸鬼神、彼等の群邪、また徒衆ありて」という「教行信証」の文章が、原本の内容ですと「彼等の諸魔また徒衆有り。各各自謂成無上道。我滅度後末法中。・・・」とあり、そのあと聖典にある文と似たような言葉が述べられ、その後長い文章が続きます。そしてまた、「彼の諸鬼神また徒衆有り。各各自謂成無上道。我滅度後末法中。・・・」とあり、同様に似た文があり、その後長い文が続きます。また同様に「彼等の群邪また徒衆有り。各各自謂成無上道。我滅度後末法中。・・・」とあって、そして同じように長い文があって、次に「成愛見魔失如来種」と出てきます。

要するに、彼等の諸魔、彼の諸鬼神、彼等の群邪を、ばらばらに述べているのを、共通部分だけを取り出してまとめた文章とされているんですね。そしてそれらのやっていることは、成愛見魔失如来種に他ならない、と結ばれているわけです。

こうしてみると、この要旨は「末法になると、魔民や鬼神が多くいて、愛見の魔と成って如来の縁を奪ってしまうのである」とまとめることができると思います。その魔の正体は何かという問題ですね。

(余談ですけど、『和讃』に「首楞嚴經によりて大勢至菩薩和讃したてまつる」として八首作られていますね。親鸞にとってはこの経には慣れ親しんでおられたかなあとも思われます)

次に『灌頂經』にまいります。この經典も長い名前です。『灌頂三帰五戒帯佩護身咒經』というんだそうです。ここでは前文と違って「仏教徒を護る」と言っております。

この二つからいえることは、鬼神に善鬼神と悪鬼神とがいるということを示しているようです。そして次の『地藏十輪經』はその教誨の言葉でしょう。吉凶を離れる、ということは凶からばかり離れることではなく、吉からも離れる、という意味ではないのか、と思います。ですから善鬼神から守護されていることから離れるということでしょう。「吉凶の相」というのはすでに妄執である、と指摘しているのでしょう。善

鬼神だから祭って悪鬼神だから排除する、ということは、すでに「吉凶の相（思想）」に囚われている証拠でもあるのです。そしてそのことは『集一切福德三昧経』・『本願薬師経』にて「余乘に向かわざれ、余天に礼せざれ」「余」のことまで広げて指摘しているわけでしょう。そのことは『本願薬師経』の「また言わく」以降で詳しく述べていますね。それを究極的に『菩薩戒経』にて自分の身近な有縁のところまで述べられています。きびしいとも思いますが、ここで「礼する」ということの意味を確かめなければならない、ということを示唆しているようにも思います。ここでいっ<sup>結ばれている</sup>たん切れていると考えています。

（『坂東本』では、そこで切らずにすらすらと書かれていて、「後序」の前が一行空けて書かれています。また『高田本』では、「後序」の前でも目立った切り方をせずに、つらつらと述べられていきます）

そして、『仏本行集経』と『起信論』をもって、インドの出来事や事象を述べている、ということでもあるかもしれません。そうしますと次は『弁正論』から『論語』までが中国（大陸）の出来事や事象を述べ、『止観』と『論語』で教誡を示しているのではないかと考えられます。

そして、『後序』と言われるところから『安楽集』までが日本の出来事や事象を示し、「しかれば」から『華嚴経』がその教誡であると思うのです。

もう一度、最初まで振り返って、総括してみますと、前半では、インドにおける女性の仏への帰依、そして中ほどは、世間の社会構造の外教・邪偽の異執、後半はインド・中国・日本の外教・邪偽の異執の姿を述べている、と言えるのではないのでしょうか。当時ではこの三国をもって世界を表していると考えていいかと思えます。

こうしてみてきますと、『月蔵経』のところでは遠い過去から釈迦が出るまでの歴史的世界観を示しており、『仏本行集経』からは、インド・中国・日本という空間的世界観を表現している、という時間的空間的世界観を示していると言えるわけです。このことは「あらゆる世界に外教・邪偽の異執が散在しているんだ」ということを述べようとしておられると、私は感じているのです。そして、親鸞自らの時代でもその異執が沸き起こってきた、ということを経験自身が実感されたことなのでしょう。

最後になりますが、このいわゆる『後序』の文。これを「後序」とみるか、広瀬先生のように「流通分」と見るか、前述のように、異執の日本における実証としてみるか、という問題を、以前申し上げたかと思いますが、このことについて、もう少し申し上げておきたいと思えます。

その前に参考資料として、『六要抄』『相伝』では「流通分」、「智進」「慧琳」は「縁起」とし、「法住」は「後序」としている。（『教行信証の復元研究』鳥越正道著より）

「流通分」とみると、これは「教行信証」全体を受けて、その浄土真宗が流布してきた事実を述べていることとなります。私たちはなぜ「後序」としてきたか、考えるべきだろう。

まず、日本に起こった「異執」の事実と考えると、この『末巻』の締めくくりにはなりません。ただボツと切れたままの文章になってしまいます。まさに『信巻』と同じような終わり方です。そう致しますと一つ考えられることは、『信巻』と『末巻』は同じ質の「巻」である、というような気もしてきます。

次にこの部分を『後序』と考えると、「後序」という言葉の持つ意味を明らかにしなければなりません。「序」とは前文、前書き、書き始め、導入文などの意味を表します。ということは、これから書くべき文章のきっかけの文とも言いましょうか。そう致しますと、最後にあるのは、ちょっと変であります。それでこの「後」をどう読むのかに、問題は移ってきます。

まず「～のあと」という意味がありますが、次が「序」ですので「～のあとの序」となり、よくわかりません。次に「のち」と読めば「のちの序」となります。つまり「これからの序」ですので、「これから始まるための序」という意味を持ってまいります。

そう致しますと、ここに述べられている承元の法難と法然のもとで念仏の教えに帰依していった事実を出



発として、今度は我々が、自らの信仰と次の私たちの世代の外教・邪偽の異執を教誡していかなければならないことを暗示しているとも考えられるのであります。そういう意味では、『後序』と呼ぶことも大事な意義を持ってくるわけです。

しかしながら、そもそもこの『末巻』は、『本巻』の p 358 ▲

「しかれば末代の道俗、善く四依を知りて法を修すべきなり」

という結びがあって、そのために二つの「教誡」を示しておく、ということで、一つは

「邪偽・異執の外教を教誡する」

ということですね。そして二つ目が イマシム『坂東本』

『坂東本』では表紙に「頭浄土方便化身土文類六本」

「外教・邪偽の異執を教誡する」

『高田本』の表紙は南無阿弥陀仏、その裏に標挙の文

ということです。そう致しますとこの『末巻』はこれ独自で独立しているのではなく、『本巻』のそこからの延長線上にあったわけです。『坂東本』では本・末別閉じになっていますが、『高田本』では、本・末連続していて、「末巻」にあたる文頭の右上に小さく「末（始?）」と書かれている程度です。

そう致しますと、その「外教・邪偽の異執を教誡せば」という文脈上にこの「後序」があるのでどう読めるのか、考える必要があると思います。ということはこの「後序」の文は、日本の「外教・邪偽の異執を教誡」している文としてみるべきであろうと思われます。

ではなぜ「窃かに以みれば」なのかといえば、いうまでもなく自らの実体験だからです。そう致しますとその実体験はまさに「外教・邪偽の異執」の实在であった、という領きとして了解できるのではないかと思います。そしてその「教誡」の言葉は最後の『安楽集』と『華嚴経』の文となるでしょう。私はそういう見方をしたいと思います。

次に、中国の『弁証論』のところですが、道教と仏教との対峙ですが、この論議をどう見ますでしょうか。一見子供の喧嘩のようなやり取りですけれども、その書風は外（道教）と内（仏教）を対峙させ、開士が判定する形で話が進んでいく。ですから解りやすいといえばわかりやすいですね。そして仏教用語と中国国内で使われている言葉と同意語がある、という説明をしている。そしてそのあと、仏教經典の引用がつつらと出てくるのである。この辺が漢字文化圏である中国と日本の問題の類似性があるのではないかと感じます。

そして、「後序」の文に続いていくのですね。

今回は、ここまでにしておきましょう。